手賀沼が海だった頃

NO. 12

地域の歴史や自然を皆で語ろう

2004. 10. 28

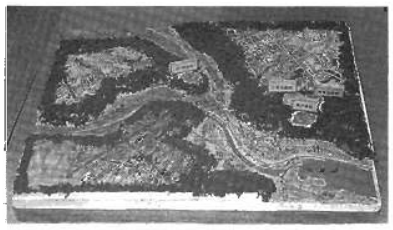
手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

11月28日（日）開催

シンポジウム＆展示会「松ヶ崎城と街道（みち）」

祝柏市制施行50周年・当会設立5周年を記念して11月28日、柏市中央公民館でシンポジウム＆企画展示会「松ヶ崎城と街道（みち）－中世柏地域の陸上交通」を開催する。当会主催、柏市・柏市教育委員会後援。

JR北柏駅東側に広がる中馬場遺跡（柏市）は、古代の大規模集落として知られているが、第4次調査（昭和57年～62年）で数多くの中世の遺構・遺物が発見され、千葉県下でも例の少ない、豊富な遺物を持つ遺跡だとわかってきた。隣接する「法華坊館跡」「根戸城跡」（我孫子市）と考え合わせると、交易・商業の中心の「宿」だった可能性が高いとする論文も発表された。松ヶ崎城はその北柏駅から、約500メートルの位置。



北柏駅～松ヶ崎城地域の模型試作品。現在展示会用を製作中

一昨年、昨年と行われた確認発掘調査の結果で新たになった松ヶ崎城の実像とともに、北柏駅周辺遺跡の特徴や松ヶ崎城との関係を、シンポジウムと展示会で探っていく。

【シンポジウム】

・「手賀沼と水戸道中」中山文人さん（松戸市戸定歴史館学芸員）

・「松ヶ崎城跡の確認発掘調査でわかったこと」間宮正光さん（山武考古学研究所首席研究員）

井上文男さん（柏市教育委員会文化課文化財担当）

・「松ヶ崎城はどんな城だったか」遠山成一さん（千葉城郭研究会事務局長）

＊司会　鈴木英夫（國學院大學講師、当会顧問）

▽午後1～4時▽柏市中央公民館5階講堂▽予約不要（当日はお早めにどうぞ）▽資料代300円▽先着180人

【企画展示会】

当会がこれまで取り組み製作した「松ヶ崎城模型」「絵馬再現プリント」「古代東海道の路線地図」に加え、柏市教育委員会の協力で、松ヶ崎城跡と中馬場遺跡の出土遺物が展示可能となった。松ヶ崎城跡・北柏周辺遺跡・松ヶ崎不動尊絵馬・古代東海道・当会の活動の5コーナーに分け、展示する。

▽午前10時～午後4時▽柏市中央公民館3階美術サロン▽入場無料

NEWS！ 会からのお知らせ

松ヶ崎城跡を整備

今年7月1日付けで、柏市指定文化財になった松ヶ崎城跡。今後どのように保全・活用していくかは、柏市と市民との協働となっていく。それに先立ち、柏市教育委員会文化課文化財担当の方々と当会役員で7月3日、城跡内を整備。看板を取り付けたり、城跡を傷めずに見学できるようにロープを張るなどの作業を行った。

市民公益活動補助金の交付団体に

柏市が募集していた平成16年度市民公益活動補助金の交付を当会も受けることになった。

同補助金は、「不特定かつ多数の方の利益の増進に寄与する団体を支援する」目的で、当会はひよこコース（自立支援）に応募。当会の活動が認められました。

シンポジウム・展示会を柏市、柏市教育委員会が後援

11月28日のシンポジウム・展示会とも柏市、柏市教育委員会後援。シンポジウムでの講演の他、遺物など専門的な知識も必要で、文化課のアドバイスをもらいながら一緒に準備をしている。

城跡にチダケサシ

やや湿った山野に生育するチダケサシが松ヶ崎城跡で見つかった。「チダケサシはもっと山深い場所に生えています。開発の進んだ柏市の真ん中で見つかるのは珍しいのでは」と植物の専門家。

バス見学会「東海道を歩く」の宿題2つ・・・予想外の難物（下）

松本　松志

Ⅲ　松下説を辿ったら、「香取の海」の湿地帯に、はまってしまった

1　古代東海道「松下説」の推定ルートを、推定する

「松下説」が、どんな内容の説か簡単に検討したが、相当問題のあるものという印象が強い。これまでのデータで結論を書けば、松下説は学説に当たらない。よって高田説の関連を斟酌する必要はない、ということになる。しかし、松下説にだんだん肩入れする心境に陥っている筆者としては、きちんとルーツを調べたくなってきた。

しかし、学力不足から「高田説」の評価や当否の判断をするつもりは毛頭無い。（筆者の個人的見解では、「高田説」が早晩「定説化」すると考えている。しかし松戸の住人には手賀沼以北は地理的に遠くてよく分からない。特に「榛谷」についてはわからないので、なるべく評価には言及しないようにしたい。）

そこで、もたもた調べ始めると、いろいろ手掛かりもあり、逆に問題も多く残されていた。

「松下説」は、松戸市の広報紙に書いたものがもっとも詳しい。煩瑣だがもう一度再録すると、「下総国府である国府台から式場病院前－夏刈－陣ヶ前－松戸新田－稔台－日暮－京葉ガスタンク前－栗ヶ沢－酒井根（柏市）－を経て我孫子町鎌倉街道（根戸）」（注1）とある。三つ目の「夏刈」は小字名で、大字は大橋村に当たる。ちなみに夏刈は筆者の住所の字名である。夏刈は「二十世紀が丘」に接し、一部は区画整理地に含まれた。

そんな訳で、筆者は地元の人間の一人として、郷土史家的立場から自然に松下説へ肩入れしている訳である。

2、夏刈に住む郷土史家として、松下説を補強する

そこで、夏刈に住む郷土史家として、論拠を示さない松下説を補強するには、二つの仮説が成立すれば十分なことに気づいた。

一つ目は、松戸市大橋字夏刈を古代東海道が通ること。

二つ目は、松戸市内に茜津駅が設置されていること。

右の二つの条件から、里程上ほぼ自動的に井上駅は、東京の低地、墨田周辺となりそうである。

設置場所に関する理由付けは後からどうにでもなるので、まず最初に検討したことは、松下説において井上駅を国府台に比定している可能性を考えていたが、そういうことは零ではないにしても考えづらい。松下邦夫さんが編纂に携わった松戸市史は、市史としての独自説を示さなかった。紹介した説は、井上（墨田）－茜津（松戸）－於武（我孫子・布施）とあり、井上を東京の墨田に比定し、松戸市松戸を茜津に比定し、江戸川沿いに北上し、布施から常陸の国に入る駅路を支持した。昭和36年11月のことである。

松下説補強上、松戸市史の「井上の場所」（墨田説）だけ頂いて、後は無視することにする。これで夏刈の郷土史家は二つの仮説を成立させ、松戸市史とも整合性がとれ、補強はかなり進んだ。地元の通説にもきちんと馴染ませる事が出来た。

1992年新山遺跡の報告書が出され、道路遺構の発見が知られるまで専門家ですら井上駅＝国府台説は採用されていなかった。その意味で、井上＝墨田説は当時の世間並みの考え方である。

まだ、中央学会では茜津駅を松戸市内に設置する考え方がほぼ定説化していた。少なくとも、茜津は江戸川水系と見なされていた。

松下説は通説に従わず、地元の観察・研究から、松戸市松戸を通らず、夏刈に古代東海道を通すところが最大の魅力でもある。（茜津を香取の海まで移動させたのは、高田説の革新的なところである。そのためには、松下説より20年の時間が必要だった。）

次の問題は、新山遺跡も、日秀西遺跡も発見されていない昭和47年当時、松下説は茜津を、どの様に考えたか。

3　茜津駅はどこか？・・・松戸市内ならどこでもあり。

松下説を補強する立場で考えても、茜津は「津」とあるので、太日川（江戸川）に置きたい。しかし、ルートを先に決めた都合上、港の機能は無視するにしても、市内に適地はない。本当は地元の「夏刈」か「二十世紀が丘」にしたいが、どうにも国府に近すぎる。市内の適地が無く困っていた。

ところが、鈴木風南子著「北総古道考」（松戸史談［1990年刊］）（注2）に「来葉」に関する記載がある。掲載された地図を見る限り、松下説の「日暮」に近く、古代東海道想定ルート上の八柱駅西側一帯に当たる。

ここに、一遍上人の時宗寺院（現在、北松戸駅の南方の台地（移動）の礼拝山本福

寺があったところで、いまは使われていない地名である『来葉』は、時宗の礼拝がなまって当地の字名になった(佐藤副住職談)とある(注3)。悠に鎌倉時代まで遡る事が出来る。松戸市内の茜津の比定地として、ここが最適である。遺跡がないのは弱点だが、欠点と言うほどのものではない。本音をいえば、次の「於武」駅を「我孫子町鎌倉街道(根戸)」にする都合上、これ以上、茜津を北上させる訳にはいかないという事情もある。

4　茜津駅にあわせると、於武駅は根戸になる

於武駅の候補としては、当時、富施、青山、戸頭など、いろいろ取りざたされている。松下説は明記していないが、夏刈の郷土史家としては、我孫子市根戸以外に設置するつもりはない。これ以上遠いと松戸市内に茜津駅が設置できなくなってしまう。

松下説補強はこれでほぼ完了である。これ以上、他の市町村がどうなろうが、基本的には関知しないのが郷土史家である。

しかし、ここまで松下ルートが高田説と一致してくると、於武(根戸・鎌倉街道)の先が、興味やら心配が生じてくる。松下説と高田説の大きな相違点は、茜津である。松下説を補強する立場で検証してみると、個人的先入観で日秀西遺跡が発掘されていない当時では、古代東海道の駅路は、当然のこととして根戸から北上し、布施を通って常陸の国の榛谷駅に行くと考えていた。しかし、論拠は全くないことに気がついた。

わざわざ、「鎌倉街道」と明記した松下さんの本意は不明だが、無理をすれば古代東海道が手賀沼北岸を東に進む高田説と同じルートの可能性は十分残っている。つくづく巧みな表現力に感心する。

昭和40年代だから、松下説は、「松戸に茜津」を置く至上命題を受けて、手賀沼北岸の迂回路(高田説)は採用せずに、里程上、古代東海道は水戸街道沿いに北上させたい。しかし、あえて「鎌倉街道」と書いた点を深読みしたくなる(注1)。老獪な松下さんは、反論されないように都合の悪い時は、大事なことでもあえて触れなかったり、そっとほのめかす手法は効果的である。

現在、県立湖北高校がある日秀西遺跡。昨年11月のバス見学会で

5　「結論」・・・松下説は高田説の先行研究に当たるか？

松下説と高田説の研究史的関係をはっきりさせるほどの能力に欠けるので、松戸の郷土史の範囲で「松下説の影響」の有無と、松下説の類似した「古代官道」説を検討すれば、ほぼ、高田説との関係が明確にできそうである。

松戸に関する前掲の松戸史談掲載の「北総古道考」(1990年2月発行)がもっとも詳細な古代東海道に関する論考である。

筆者の鈴木風南子氏は、武蔵の国の東海道編入以前を「古東海道」と命名し、東海道編入後の771年以降を以降を新東海道と区別している。

この「新東海道」のルートとして、氏が採用したルートは、

①豊島(東京都浅草)－墨田宿－立石－小岩－真間の入江－下総国府－上総国府(五井)。

②立石から別れて、立石－柴又－太日川(からめきの瀬、現江戸川)－国府台下総国府－来葉－大井(沼南)－手賀沼－根戸(我孫子市)－布施－(草門焦)(七里の渡し)－戸頭－取手市台宿の道－以下略)と続く。これでは、松下説、高田説と重なるようでいて、そうとも言えない。氏の考えでは、「川曲」は小岩、豊島は浅草、井上は千葉市猪鼻、浮島は不明、茜津は松戸、於武は不明とある。さらに、茜津は松戸市内と想定しているが具体的地区は不明として、『津』であることは変わらないと思うので、『太日川』との関連で調べを詰めるべきもの思うが、現地を踏査されて諸先生が書いたものか疑問が多いのである。」(注2)と、相違点もある。しかし、「於武」は不明と言いながら、『於武』であるが沼南町大井－我孫子市根戸－柏市布施－取手市戸頭の中であろう。」と、共通点もある。(実は、松下説の「於武」の想定地を「根戸」と想定した論拠はこの風南子説に依拠した)。

しかし、茜津を太日川沿に想定している点で最初は読み落としていた論文であったが、じっくり読み返してみると、「下総国府から東北に進み常陸国府石岡に通ずる今一つの古官道について更に考えてみたい。」(p78)という一文に突き当たった。

6　「今1つの古官道」とは、何か？

風南子氏は、この道？の最初の研究者として、沼南町遭難長高柳の酒巻勇氏を上げ、昭和52年5月に沼南郷土史研究会で「古道散歩」という見学会が行われ、逆井－大井－手賀沼のルートで実施された。同じような本会で実施した「常磐平－逆井－藤心のルートの見学会」に先行すること15年前であった。

氏もこの見学会に参加したので、いくつか資料も掲載されている。「国府より布施宿に至る古道略図」によると、国府台ー矢切ー松戸宿ー千駄堀ー来葉宿ー「コーノ巣」ー[□□神（？）]ー殿山ー大木戸ー舟戸ー根戸ー布施ー布宛とあり、街道名として「陸前浜街道」と記載されている。「コーノ巣」が「鴻ノ巣」ならば、南増尾の北東の逆井の近くの字名であり、殿山は、大津川を越えた沼南町の字名である。もう一つの地名は[神]の1字以外は手書きの地図から判読できなかった。

これは、松戸の中心部を東海道が通るという説であるので、[夏刈]を通過しないルートは本稿では検討対象から除外していた。まったく読み込み不足であった。本文80ページには注目すべき記述がある。「図（古道略図のこと）のような調査資料も作られ、里程関係も調べられていた。地元として一番始めの研究者であったと思う。明治十三年の迅速地図を見れば台地の尾根道で、下総国分寺、国分尼寺からの道を合わさって、東北に向かって走っており、千駄堀の南方で『来葉』を通り、逆井で東武線を横切り、」とある。「台地の尾根道が北東に向かう」と言えば、これは松下説と同じである。調査資料とは明らかに違う。

本文の続きを書くと「沼南町の『塚崎』に入り、『大木戸』を経て現在の福万寺の東側の台地を越えて手賀沼の縁に出る道であり、これから手賀沼の三里の渡しを渡り我孫子市根戸に上がり現在の根戸の北西神社の裏の九尺道を通り、柏市布施に向かっている。」とある。個人的には、松下説はこの酒巻説の改良バージョンではないかと勝手に想像している。

しかし、本文の引用から分かるように、資料と本文のずれをどう解釈したらよいのだろうか。

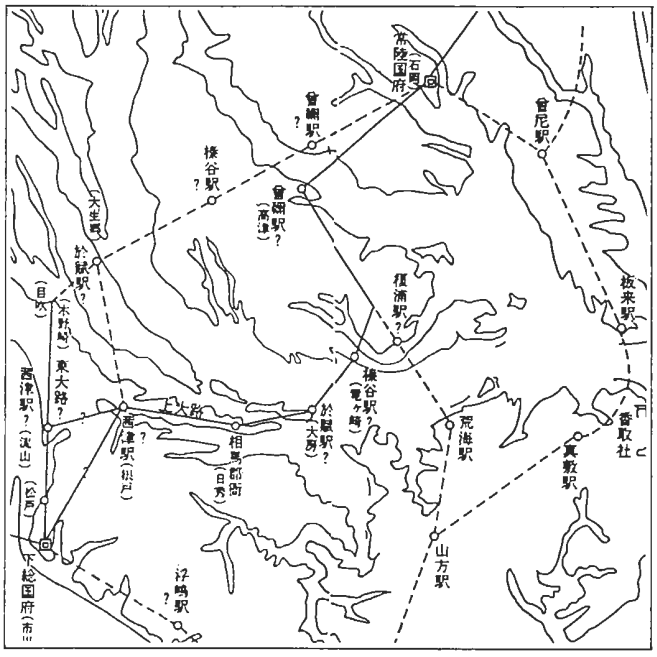
なお、鈴木南風子氏は松下説には一切言及していない。北総古道考は四年間の連載論文であり、これほど長文の著述に、同じ松戸史談会の中心メンバーである松下邦夫さんの研究が全く触れられていないということは、松下説が地元でも学説として定着していないという傍証と解せざるを得ない。

著作全リストにも記載されていない「いちご公園の説明板」から始まった調査は、これで一応の結論を得たと考える。

7　「新山遺跡」と「鹿島前遺跡」の発見

「新山遺跡」、「鹿島前遺跡」発見は、井上駅を下総国府の付属駅と確定し、それにより古代東海道のルート論争に決定的な役割を果たした。

これに関連して、我孫子市史研究14（1990年3月発行）に大変興味深い対談が載っている。西島定生氏と下津谷達男氏の対談「古代下総国の相馬郡と葛飾郡」である。



「下総・常陸間交通変遷図」（西島定生作図）
茜津駅から北東へ進むルートが松下説

8　松下説を主張する「ある先生など」が、いたらしい

西島氏は、自説の茜津「流山説」を説明する中で「ある先生などは、台地の中を通って手賀沼までのストレートに入ってしまう。そういう斜めの路線（北東に進むルート）を考えておられる先生もおられるのですけれど、」（前掲P46）と、「古代交通路変遷図」には松下説と同じルートを書き込み、有り難いことに松下説をライバルと見なしている。

相馬の御厨を中心に、多岐にわたる古代東海道に関連した対談で、日秀西遺跡は、すでに重要なファクターとして随所に論拠として使われているが、報告書が発行される直前の「新山遺跡」の道路遺構発見は、両先生はまだ知らないらしい。発掘報告書を見る限り、新山遺跡の発掘担当者は、道路遺構としての重要性を把握し切れていないようで、発掘後宣伝をする時間があったはずなのに専門家が知らないのは、いまで言う情報発信が不十分だったようである。

新山遺跡に全く触れられていないため、最近にもかかわらず、今から見ると一時代前の時代背景での対談になっているようである。古代東海道の対談内容は、ほぼ「下総・常陸間古代交通変遷図（西島定生作図）」にまとめられている。

作成者の西島氏は、従来、「茜津」は松戸や中央で書かれた文献は松戸説を採っているが、発掘先進地域（都市化）の松戸で、駅屋を出すような平安期の遺跡があまりでないという考古学者としての視点と、松戸が国府に近すぎる点を論拠に茜津を流山（茂呂神社周辺）に比定し、大変苦慮しつつ於武を手賀沼北岸の日秀西遺跡の東（布佐方面）に想定している。

て、自説を展開していただいている。（なお、斜めの路線（北東に進むルート）は、松下説が図示されたいままでの唯一の例）。「ある先生」の中に、当時存命中だった松下邦夫さんや酒巻氏が含まれているか不明であるが、西島氏は茜津＝松戸説の呪縛から解放されており、ここが大きな質的相違点である。他方、西島説と高田説を比較すると、これまた大きな質的相違点が残っている。仮に、新山遺跡の情報を発掘後すぐに入手していれば、西島説は、ほぼ高田説に近い体裁を整えると予想されるが、それは里程論上の類似と考えるべきではないかと思われる。

高田説の核心部分は、「香取の海」による水上交通と陸路の併存を武器にしている。西島氏の太日川水系に茜津を比定する立場とは大きな隔たりがある。

高田説は、茜津を里程上から「藤心」を想定したのではなく、手賀沼水系が下総国府から見て最短距離で結ぶ場所が、大津川水系の柏市藤心であった。事実、見学中の解説でも、高田さんは、茜津は藤心から、柏市役所までの範囲、言い換えると、下総国府から15キロの範囲の手賀沼水系ならどこでも候補地と考えていることを示唆していた。見学会では、お気づきの方もいらしたと思うが、茜津の候補地「藤心」には、バスは近づかなかった。

始めからコース外の扱いを受けていた。高田説では、藤心に執着していない。

於武の候補地の絞り込みも、里程だけでなく、手賀沼水系の入り江と現在の利根川水系の入り江が、手賀沼北岸の台地を南北から侵入した地点、台地が最も狭く、船荷の積み替えが容易なことも、よい候補地の条件である。次の駅である榛谷も、同様な視点から津や港と陸路の接点を探すことになる。

このような水上交通を重視する高田説は、古代東海道が「走水の海道」を失っても、「香取の海」で代わりの海道を獲得し、「東の海道」の名に恥じない古代東海道のダイナミックな姿をイメージさせくれる点も魅力の一つである。

9　終わり

昨年4月、初めて地元の松戸秋山高校に転勤し、松戸の郷土史を教材に「新山遺跡」から「二十世紀が丘」―「和名が谷中学校」周辺の古代東海道を教材にした。生徒の食いつきもよく来年度の授業には、今年の授業でやってしまったようなウソや誤魔化しを少しでも減らす下心もあり、調査を途中で終わらせ辛かった。手賀沼南岸周辺の地名には苦労させられ、土地勘が無くいまだによく分からない。夏刈の郷土史家として　11ヶ月が経過した段階では、理解より不理解が大きくなったしまった。それでも、何とか原稿をまとめる気持ちが持続したのは、見学会での新鮮な満足感であった。高田説は今後定説化しそうだという予感（注4）と、そんな場面に自分が同席しているといった不思議な感覚も同時に体験できた。この辺の印象を、率直に参加者に書いてもらえれば、私が書くより、もっと読みやすい見学記になったのに、と最後に愚痴をもう一つ追加して、まとめと致します。

注1　松下説を深読みすると、「下総国府である国府台から式場病院前―夏刈―陣ヶ前―松戸新田―稔台―日暮―京葉ガスタンク前―栗ヶ沢―酒井根（柏市）―を経て我孫子町鎌倉街道（根戸）」とあるが、その第1「式場病院前」は、新山遺跡のある化研病院のとなりの病院。第2「夏刈」は、一本松の所在地。第3「陣ヶ前」は長い直線道路（300m以上）。第4，5「松戸新田と稔台」は、この地域が新京成線建設で道路遺構は完全破壊。列挙した意図は、陸前浜街道と対比させるためか。第6の「日暮」は「来葉」のこと。第7「京葉ガスタンク前」。「来葉」から常盤平までの1キロ以上の直線道路の真ん中。当時はガスタンク以外大きな建物がなかった。第8「栗ヶ沢」。北上する直線道路の松戸側の最後の大字名。高田さんは書いてないが、ここには「大道通」、「往還通」という字名が存在。第9「酒井根（柏市）」。南増尾の旧地名。ここにも「道向」、「右大道」、「左大道」の字名が残る。柏と逆井の分かれ道。最後「我孫子町鎌倉街道（根戸）」は、高田説では手賀沼北岸の上陸地点。どれもなかなか大事な地点を選んで指摘している様に見えるが、単なる偶然の一致か。

注2　鈴木風南子著「北総古道考」（松戸史談第29号［1990年2月発行］）

注3　同「北総古道考」　P78

注4　千葉県史の「千葉県の歴史　資料編　考古3（奈良・平安時代）1998年3月（P369）新山遺跡の項に、「国府から相馬郡衙に至る道路が、（中略）東海道本道の駅路、及びそれに準ずる官道として使用されたもの、とする解釈も提示されている。」と、高田説を支持している。同様に、「千葉県の歴史　通史編（古代2）　2001年3月刊」（P241）「第3節掘り出された古代房総の道」に「和洋学園国府台キャンパス内遺跡」と「新山遺跡」を受けて「これらの遺跡は、下総国府の推定地に極めて近いことや、明治時代の迅速測図に見える直線的道路合致していることから、連続した道路遺構であると考えられている。そして、805（延暦二十四）年以降に変更された東海道である可能性も想定できる。」と、持って回った表現で高田説支持を表明している。高田説支持の姿勢は、水上交通の重視を含め他の箇所の記述でも見られ、たとえばP233の「図33 Ⅲ期（805年～10／十一世紀）の駅路では、高田説ルートのみ記載されている。

地域史を語る会 9月・10月 ミニ講演を開催

毎月第1日曜日に開催中の「地域史を語る会」。9、10月の例会では自身のテーマを追いかけている人を招き、ミニ講演を開催しました。地図やイラストを多用した資料を示しながら、また写真を見せながらの解説に、「この地域にこんな歴史があるとは思わなかった。とても面白かった」と参加者。

9月は会員・藤邨昭男さんの「香取神宮を取り巻く船運と地域の津」、10月は秋水研究家・小林正孝さんの「大平洋戦終戦直前のロケット戦闘機 秋水と柏」という内容でした。

なお、11月の例会は沼南町の講演会に参加します。詳細は次のとおり。

▽11月7日午後1時30分～▽沼南町役場2階大会議室▽演題「もう一つの新撰組-北総の幕末維新」▽講師 中村勝さん(沼南町町史編さん委員他)▽参加無料▽会への連絡は不要▽地域史を語る会・問い合わせ 下欄事務局まで

おいしい料理を食べ歩きましょ♪

会員有志で柏近辺のおいしいお店をまわっています。イタリアン、そば会席、フレンチと味わい、前回は吉川のなまず。さて今回は？ ランチを予定していますが 詳細はお問い合わせを▽04-7133-6438 松平さん

活動記録♪

・松ヶ崎城跡整備 7月3日
柏市教育委員会文化課文化財担当の方と当会役員有志で、松ヶ崎城跡の看板設置・整備。

・「地域史を語る会」7回 7月4日
企画展「沼南のあゆみ」見学、講演「古代の沼南」「中世相馬氏と将門伝説」に参加。8人。(沼南町中央公民館)

・「地域史を語る会」8回 9月4日
参加17人。(柏駅前通商店街会議室)

・「地域史を語る会」9回 10月3日
参加9人。(青山ビル3Fカルチャースペース)

会員募集中♪

地域の歴史や自然に興味のある方、一緒に活動しませんか。年会費は2000円、申し込みは事務局まで。「お名前、郵便番号、住所、電話、ファックス、メールアドレス」をハガキ・ファックス・お電話・Eメールのいずれかでお知らせください。会費は左記振込み先までお願いいたします。

▽会費振込み先 千葉銀行柏支店(店NO-008)普通預金3461475(手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 伊江有可里)

▽会費等問い合わせ
松平信子 TEL&Fax 04-7133-6438

郷土史素人目 ―手賀沼―(2)

中津川督章

常総に広がる「香取の海」とは、関東において東京湾と並ぶもう一つの内湾であって、それを古代・中世を対象に、後に名づけて学問上の名称としたものだという。

ところが驚いたことに古代の内湾想定図は、少なくとも手賀沼に関して、縄文海進時の想定図とあまり変わりのない図を用いている。極端な例では、近世初頭にも用いられている(URBAN KUBOTA 19)

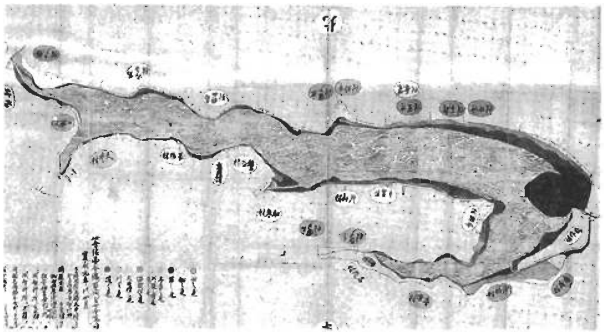
この会報のタイトルである「手賀沼が海だった頃」や「香取の海の一部であった手賀沼」という表現は、果たして近世初頭まで当てはまるであろうか。

まず、古代はどうだったか。平常重の伊勢神宮への領地の寄進状に、「手賀水海」という呼称が出現する。これは文字通り、手賀沼がショッパイ海でなく、淡水の海であることを示している。手賀沼の香取の海への出口は、我孫子市の布佐と印西市の木下の間でかなり幅がある。この部分が浅く狭くなり、潮が上がらなくなった状態が水海となった理由であろう。手賀沼は半ば川のような状態で、この時点で既に「香取の海」とは離されている。このことは香取の海を航行していた海船が、手賀沼には入れなかったのではないかという想像に導く。

沼南町が所蔵する資料の中に、宝永元年(一七〇四)の、測量されて描かれたと思われる実に正確な手賀沼絵図がある＝写真。この絵図の年代は、近世に入って百年、利根川を東遷して、たかだか五十年である。東端の布佐近辺の草地に注意していただきたい。もうこの時は、出口は完全に陸化し、利根川に向かって一本の水路が延びている。

ちなみに、沼南町の沼寄りの人々は、現在でも手賀沼のことを「川」、我孫子側を「川向こう」と呼んでいる。沼南町大井の絵図で「手賀浦川」と書かれたものもある。

【訂正】「郷土史素人目1」で、「手賀には沼周辺で唯一古代瓦の出る廃寺があった」との記述がありました。「唯一」は間違いで、我孫子市の船戸遺跡・印西市の木下廃寺からも出土しています。お詫びして訂正いたします。



手賀沼岸村々図。沼南町役場所蔵

会報編集・作成 浦久淳子 TEL&Fax 04-7155-2351

事務局長 槙 慎吾
〒277－0826
千葉県柏市宿連寺232－14
エムエイシイ事務所内
TEL&Fax 04－7134－3322
Eメールアドレス
macmaki@alpha.ocn.ne.jp